

自然観察NOW

野幌森林公园自然情報

2004.11.7 No.8

北海道ボランティア・レンジャー協議会

秋のありがとう観察会に想う

晩秋の一日、ゴミ拾いを兼ねた観察会に参加していただいたことに感謝申し上げます。春夏秋と私たちを楽しませてくれた野幌の森に感謝の気持ちをこめゴミ拾いを兼ねた観察会は、平成11年から実施しています。当初はゴミの量も多く、大沢コースにも大型ゴミが捨てられていましたが、ここ数年は本当にゴミが少なくなりました。

しかし、車が通れる登満別線には空き缶・ペットボトルや大型ゴミやタイヤが捨てられていて毎年春に清掃活動を行っているのが現状です。

自然の中で無意識に捨てるゴミは、毎日の生活のゴミに対する意識を反映させるものだと思います。毎日家庭から出されるゴミの処理や対応が自然のなかに出て行ったときにも現れるとの指摘もあります。日常の生活でゴミを減らす努力が、森の中でのポイ捨ての減少につながっていくのでしょうか。

ゴミ拾いの行事に関連して、札幌市のゴミの現状のデータがあります。1日のゴミの収集量は1892㌧、パッカー車で630台分あります。年間48万8千㌧、札幌ドームを枠にすると、3杯になり、処理費用は3百億円だそうです。

これから社会は持続可能な循環型社会を作っていくことだと言われています。ゴミはゴミであるとの考え方からゴミは資源であるとの発想です。私たちの生活は限りある資源に支えられています。美しい地球の環境と豊かで恵まれた生活を未来の子どもたちに引き継ぐためには、環境と経済が両立した循環型社会を作っていくことが必要なのです。

Reduce	ゴミを減らす
Reuse	繰り返し使う
Recycle	再生資源に戻す

循環型社会を作っていくキーワードとして《3R》があります。1つは「ゴミを減らす」、2つには「繰り返し使う」、3つには「再生利用」、これを3R(スリーアール)といいます。森の中のゴミを拾う行為を発展させ日常のゴミをどうするか考えてみましょう。

日本のゴミデータ(年間)

・ゴミの排出量

5210万㌧ 東京ドーム140杯分
国民1人1日あたりの排出量 1.124kg

・ゴミ処理費用

日本全体でかかった費用 2兆6029億円
国民1人あたりにつき年間 20500円

12月の観察会は?

●12月の森の観察会 12月16日(木) 10:15~12:30 野幌森林公园開拓記念館集合

平成16年最後の観察会です。多分根雪になっていることでしょう。あまり積もっていない雪の上を歩きながら、冬の森の様子を観察しましょう。

ハシブトガラとコガラ

葉が落ち冬に向う林は野鳥観察に都合のよい季節になってきました。夏鳥と冬鳥が入れ替わる時期でもありますが、餌を求める木々の間を飛び回る留鳥の姿をじっくりと観察できる時期もあります。特に混群をつくるカラ類は同時に数種を観察できます。その中で、見分けに苦戦するのがハシブトガラとコガラの違いです。

両種ともスズメ目シジュウカラ科で雌雄の色は同じです。特徴である頭の黒い部分と喉はハシブトガラが光沢があるのに対しコガラは光沢がありません。

ハシブトガラの嘴は名の通り太めですが、コガラはやや細めです。

また、尾羽を広げると、ハシブトガラは角尾でコガラは円尾です。

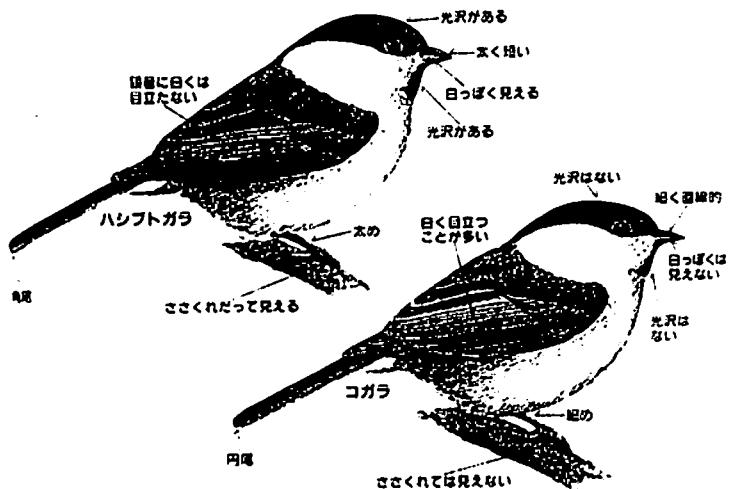
ハシブトガラの脚はふとくさきれ立っていますが、コガラは細くさきれ立っていません。

両種にはこのような特徴がありますが、動きが頻繁なため特徴をしっかりと確認できないのが悩みの種です。ハシブトガラは北海道にのみ生息していて、本州のバーダーにとっては必見の種であるとも聞いています。

ところで、シジュウカラ、ハシブトガラ、コガラ、ヤマガラ等の「…カラ」は小鳥を総称する意味とか、カル（軽い）の変化で身軽な様子からきていると言われています。コガラは平安時代から「こがら」「こがらめ」とよばれていたと言われ、ハシブトガラはコガラとの識別を意識した命名と推測されています。

（図：北海道野鳥図鑑を引用）

ハシブトガラ・コガラ比較図



今年の紅葉の感想は？

林の木々の多くが葉を落としていますが、今年の紅葉をどのように感じましたか。今年の秋は気温が高めに推移しました。9月8日には台風18号が北海道に上陸し、葉がちぎれたり枝が折れたりする樹木が続出しました。また、札幌では10月18日に初霜・初氷が観測され、10月27日には10月としては雪の統計開始以来3番目に多い8cmの積雪となりました。

このような気象条件が一因なのかもしれません。今年の紅葉はいま一の感がありましたが、毎年繰り返される「紅葉」ですが、古くは「黄葉」と書いていました。

さて、木によって色が異なりますが葉の色の変化はどのようにして起きるのでしょうか。気温が低くなり木の根からの水分吸収が少なくなると、落葉樹は、葉柄のつけねの外側からコルク質の膜「離層」を作り始めます。やがて、離層は中心まで進んで落葉を迎えるが、その痕はコルク質に守られて雨や雪にも腐ることはありません。そして、水分や養分の通り道だったところが動物の顔のような模様に残っているものもみられます。カシワの葉のように春まで枯れた葉をついている木もありますが、これは葉の付け根の部分が生きているため、離層は春にでき、その後葉を落とします。